

氏名	佐藤 惟
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 80 号
学位記授与の日付	2021 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 4 項該当
学位論文題目	ひとり暮らし高齢者の「意思決定の準備」に関する研究 —福祉専門職によるアドバンス・ケア・プランニングの発展—
論文審査委員	審査委員長 木村 容子 審査委員 菊池 いつみ 審査委員 後藤 隆 審査委員 金子 恵美 審査委員 潮谷 有二

## 【論文要旨（アブストラクト）】

### ひとり暮らし高齢者の「意思決定の準備」に関する研究 —福祉専門職によるアドバンス・ケア・プランニングの発展—

博士後期課程(2018年9月満期退学) 佐藤 惟

#### 目的

ひとり暮らし高齢者が人生の最期の迎え方について考え、周囲と話し合いながら、将来の意思決定に備えて本人の意思を共有するための準備のあり方を、福祉専門職によるACPの発展の可能性に着目して明らかにすることを目的とした。

#### 方法

本研究では3種類のインタビュー調査を実施した。①ひとり暮らし高齢者7名への調査、②介護支援専門員16名への調査、③ひとり暮らし高齢者6名とその担当介護支援専門員6名の計6組12名への調査である。分析の視点として「希望の概念」、「全人的な視点」、「人生の最終段階を支えるソーシャルワーク機能」を提示した。調査はいずれも日本社会事業大学社会事業研究所研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

#### 結果

ひとり暮らし高齢者7名のインタビューの分析から【介護・療養に関する希望】、【社会・交流に関する希望】、【財産・法律に関する希望】、【死後の手続きに関する希望】という4つのカテゴリーが生成され、ひとり暮らし高齢者が抱く多様な希望の一端が明らかになった。

介護支援専門員16名への調査の分析からは、ひとり暮らし高齢者について【本人から将来の希望が語られない】、【亡くなる過程や最期を迎える準備について知る機会がない】などの課題があること、福祉専門職自身が【死に関する意識】や【死に関するコミュニケーション技術】、【福祉専門職としての立ち位置】などの課題を抱えていることが明らかになった。

ひとり暮らし高齢者と担当介護支援専門員の計6組12名への調査から、高齢者と専門職の関心のズレや、親族のサポートが十分ではない高齢者にとって福祉専門職が「意思決定の準備」に関する貴重な相談相手となる可能性などが示唆された。

#### 結論

今後福祉専門職がソーシャルワークの視点から関わることでひとり暮らし高齢者の「意思決定の準備」は進みやすくなり、現状のACPを方法的にも、内容的にも発展させられる可能性が高いことが明らかになった。

## **[Abstract]**

### **Research on the “Preparation for Decision Making” for the Elderly Living Alone: Development of Advance Care Planning by Social Work Professionals**

Yui Sato,  
Doctoral Course, Graduate School of Social Welfare,  
Japan College of Social Work

#### **Objective**

This study explores the way in which elderly people living alone can prepare for shared decision-making on their end-of-life in consultation with others. To achieve this end, this study focuses on how social work professionals could potentially develop Advance Care Planning (ACP) practices.

#### **Methods**

I conducted three types of interviews in this study. That is, 1) An interview survey of 7 elderly people living alone, 2) An interview survey of 16 care managers, who are key persons in the home care support of elderly people, 3) An interview survey of 6 elderly people living alone as well as 6 care managers in charge of their support. As viewpoints of analysis, I presented “Concept of Hope”, “Holistic Viewpoints”, and “Social Work Function to Support the End of Life”. I conducted all of these surveys with the approval of the Research Ethics Review Committee of Institute of Social Work at Japan College of Social Work.

#### **Results**

In analyzing interviews with the 7 elderly people living alone, I created 4 categories: “Hope on Care and Recuperation”, “Hope on Socializing and Interaction”, “Hope on Property and Law”, and “Hope on Post-mortem Procedures”. In this way, I have demonstrated part of the diverse expectations of the elderly living alone in general.

By analyzing the interviews with the 16 care managers, I have clarified the challenges of elderly people living alone and social work professionals. These challenges on the part of elderly people include, for example, how elderly people do not talk about their hope about the future, or how elderly people do not have the opportunity to learn about the process of dying nor about preparing for the end of their life. On the other hand, the challenges on the part of social work professionals are involved with their aversion to death, their inexperience with how to talk about death, or their position as social work professionals.

Based on the interviews with the 6 elderly people living alone and their 6 care managers in charge, I have found differences in interest between the elderly people and the social work professionals regarding the end-of-life decision making. I also argue that social work professionals could potentially be a valuable sounding board for elderly people living alone who lack the support of their relatives regarding preparation for decision making.

### **Conclusion**

I have concluded that, preparation for decision making of elderly people living alone could be facilitated by social work professionals who support elderly people from the viewpoint of social work. This research also suggests that current ACP could be developed both in terms of methods and contents with the involvement of social work professionals.

## 【審査結果の要旨】

### 1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	木村 容子	子ども家庭福祉、ソーシャルワーク実践モデル
審査委員	金子 恵美	家庭支援、地域支援ネットワーク、保育・養護
審査委員	後藤 隆	社会調査法、質的データ分析、計量テキスト分析
審査委員	菊池 いつみ	高齢者福祉政策、福祉政策と家族
審査委員	潮谷 有二	福祉供給システム論、福祉人材政策

2020年10月30日までに提出された第3次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、11月28日の公開口述試験を行った。それらの審査を踏まえた各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ、2021年1月8日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行いその結果、審査継続となった。2021年7月15日の社会福祉学研究科委員会にて審査委員会から合格とする審査結果が提案され、了承を得た。

本学学長は、これらの手続きを経て、2021年9月30日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

### 2 博士論文の評価

研究目的の明確さは、序章において丁寧な文献レビューを踏まえ、日本の社会保障政策、特に医療政策の観点から積極的に推進されているACPのあり方への問題提起をするなかで鮮明にされている。ACPに内在する課題を抽出するとともに、それらの解決策の可能性を福祉専門職の関与に求めており、論理構成並びに論理展開の一貫性と体系性が確保されており、一定の水準を満たしている。本研究の目的は、ひとり暮らしの高齢者を対象に、生活の場・生前整理・死後の葬儀やお墓に関する話し合いを持ち、人生の最後への準備について意思決定を支援することであり、社会的意義は高い。ACPを基盤に社会福祉学の視点からの支援を提示し、福祉専門職によるACPの発展可能性を提示する研究であり、学術的にも重要性が認められる。

高齢多死社会への関心の高まりとともに、高齢者を対象とする「死」をめぐるテーマの量的研究は蓄積されつつあるものの、本研究のように、インタビュー調査によって、ひとり暮らし高齢者にアプローチした質的研究は数少なく、貴重である。調査の対象者数は限られているものの、ひとり暮らしの高齢者と介護支援専門員に対するアクティヴ・インタビューの採用は、インタビュアーとインタビューーとの協同による意味を作り出すプロセスとしてとらえる社会構成主義に基づく研究方法であり、本研究の目的遂行において戦略的であるともいえる。

文献レビューの後に、①ひとり暮らし高齢者の「意思決定に関する希望」を明らかにする、②福祉

専門職の「意思決定の準備」に関する意識を明らかにする、③ひとり暮らし高齢者と福祉専門職の「意思決定の準備」に関する話し合いの現状を明らかにする、という3点を目的として、それぞれ、ひとり暮らし高齢者を対象とする個別インタビュー調査の分析、介護支援専門員を対象とする個別インタビュー調査並びにひとり暮らし高齢者とその担当介護支援専門員を対象とした個別インタビューのペア分析を行っている。複数のインタビュー調査によって収集された非定型データの定性的な分析を行っており、研究の手続き・分析手法の適用において一定の水準を満たしている。本学の倫理審査委員会の承認を得、倫理的配慮も適切である。分析において、語りを引用しながら解釈している点は効果的であり、抽出された各コード、カテゴリーに関する分析プロセスにおいても丁寧に記述され、論述力は優れており、研究成果につなげた点が評価できる。

日本社会において、今後ひとり暮らし高齢者の増加が見込まれるなかで、これまで医療専門職が中心となっていた高齢者の人生の最期の迎え方の対応について、生活全般への支援や関係者との協働という福祉専門職の特色に着目し、近年の日本において推進されているACPの課題と課題解決の可能性について社会福祉学の立場から論じた先駆性とオリジナリティを兼備した研究である。介護保険制度の運用において課題が山積している介護支援専門員の位置づけについて、ACPの発展可能性の観点からアプローチした本研究において、その一端が浮き彫りになった点は、興味深く示唆に富んでいる。介護支援専門員や医療ソーシャルワーカーのような在宅での看取りにおける福祉専門職の役割の重視や配置を後押しするような実践的な研究成果としても期待される。

### 3 最終試験の評価

最終試験の主な審査項目につき、①研究課題を科学的に追求する自立した研究能力については、ひとり暮らしの高齢者と介護支援専門員に対するアクティブ・インタビューを採用し、分析プロセスについても丁寧に記述し、論述力にも長けていること、②社会福祉実践の向上や発展に資することのできる高度の実践的研究能力については、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）をひとり暮らし高齢者の「意思決定の準備」に援用し、社会福祉・ソーシャルワーク学及び実践への発展に寄与する研究となっていること、③社会福祉学の豊かな学識という点では、第3次予備審査の過程において、申請者が本研究に適用する概念等々に関する十分な理論整理を行ったこと等により、審査員全員一致で、博士号授与に値すると判断した。